

琉球大学学術リポジトリ

ミシガン州における養鶏業

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ライト, K. T, 山里, 将晃 (訳) メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21428

ミシガン州における養鶏業



K. T. ライト博士

る九月十六日、養鶏業者と政府並びに琉大の関係職員が琉大に集り養鶏デーの名の下に各自が養鶏業の現況をつぶさに語り、将来の養鶏業のあり方について活発に意見を交換し、お互いに学ぶことのできる有意義な一日を過ごしました。其の席上現在ミシガン大学派遣教授団団長の要職にあるK・T・ライト博士が過去二カ年間（一九五五―五七年）に成し遂げたミシガン州における養鶏業の研究結果を参考のために琉球の農家の皆様に報告する事を約束致しました。アメリカにおける養鶏業と琉球のそれとは色々と異なりますが故果して此の報告が直接役に立つかどうか甚だ疑問ですが、以下の小論がいくらかなりとも今後の琉球養鶏業の発展に益するならば幸いと存じ早速小論の抄訳にとりかかせていただきます。

さて先生の研究発表は二分冊から成っています。即ち一九五五―五六年の一年間の結果を一冊にまとめ他は一九五六―五七年の一年間の結果をまとめてあります。

此度は後者を取上げて要約致すのが当を得ているかと存じ其のうちに致します。ですから此の論中に「其の年」とあるのは一九五六―一九五七年の一年を意味し、「先年」と出てくるのは一九五五―五六年の一年を指している事を御承知下さい。

此の研究は質問紙をもつてまとめられている。そして研究はいくつかの目的をもつて行われたのであるが、就中、鶏卵生産における費用、収入、経営の相互関係を明かにしようと試みられている調査の対象となつたのは九五農家で此等の農家は調査に必要な記録を残してある人々を選んである

一、調査のぞんで

先ず各々異なる方法で鶏卵（以下卵と略す）を市場に出している州内の重なる生産地を選び、鶏の品種は軽種（以下レグホン種をもつて代表させる）、重種（以下プリモスロット種を代表させる）の両方とも含むように範囲を広げている。

九五農家の飼養羽数は農家によつて一様ではなく一二羽から六六三〇羽まであり、其の平均羽数は七一〇羽となつている。しかし後で年内に加えられた羽数まで計算すると一農家当り一二九羽平均という事になつている。

飼育品種に関しては九五農家中七五農家はレグホ

ン種、一六農家はプリモスロット（以下プリモスと略す）を飼育し残りの四農家だけが其の両種を飼つている。更にレグホン種を飼つている農家中四〇農家は近交系雑種を飼つている。

全農家の約半数は卵を却売商人を通して市場に出し、三七農家は生産量の一部を小売し、一四農家はいくらかをふ卵所に出している。

卵及び飼料価格の状況は一九五〇―五五年の平均価格がダースにつき四二・八仙で一九五五―五六の其れは四〇・六仙をして一九五六―五七の平均価格は三三・二仙になつている。従つて此の研究は過去の五年平均価格よりダースにつき九仙だけ安い年に行われたわけである。

其れに比して飼料価格は先年よりも其の年の方が高い、即ち、先年の粉餌と粒餌の混合飼料の平均価格が三・一七弗（一〇〇ポンド当）であつたのに其の年のそれは三・三七弗と値上りしている

二、平均結果

1、飼養羽数と卵生産量

其の年の平均飼養羽数は先年の其れよりも二〇〇羽程多い。

所が此の増加はレグホン種の増加とみてよい、即ちプリモス種では先年と其の年とで殆ど大差は出ていない。一羽当り年平均卵生産量は二八個で先年の其れより一ダースの増をみている。此の増加量はプリモスにおいてもレグホンにおいても殆ど同じである。

2、飼料と労働力

一カ年平均飼料消費量は一羽につき二〇〇ポンドで先年の其れより一〇ポンド少ない。其の結果卵一ダース当り飼料消費量は五・五ポンド（先年は六・四ポンド）となつている。それと同時に労働

力使用量も減つていて一羽につき一時間となつて
いる。それは先年の其れより五分の一だけ減つて
いる事になる。

3、総費用

各グループによつて卵生産量、並びに飼料、労働力消費量において少々差はあるが大きな差ではない、其の年の総費用は一羽につき七・二三弗で先年の其れより四五仙だけ少ない。飼料は総費用の四七パーセント、労働は一七パーセント、羽数の減少によるもの一九パーセント、残りの一七パーセントは其他となつてゐる。

4、収益

卵の販売(自家消費を含む)並びに鶏糞から得た其の年の総収益は一羽当六・六〇弗(先年より一・一九弗だけ少ない)で、従つて卵生産高は増えたにもかかわらず且飼料も有効に使われているのに純利益においては先年よりも七四仙だけ少なくなつてゐる。其れは其の年の卵の価格が例外的に安かつた事に原因する。其の結果として調査農家の五分の四は労働力一時間につき一・二〇弗の報酬を得る事は出来ず、全グループの平均収益は労働力一時間につき五九仙で先年の約半分(先年の其れは一・二四弗)しか得てゐない。

三、農家別比較

以上は平均的結果をみてきたが此のような平均から各農家は相当離れてゐる。先ず第一に飼養羽数において大きな巾をもつてゐる事は既に述べた通りである。又労働収益においても三・二四弗(一時間当り)の農家があるかと思つて三・八四弗の赤字を出してゐる農家までである。産卵量においては二六四個から一六三個の農家までである。粉餌と粒

餌の混合飼料一〇〇ポンド当り費用は二・四二弗から四・四七弗までの農家がある。其の事は一羽当り或はダース当りの費用に相当の差異を産むようになる。卵一ダースを生産するのに或農家では四・一ポンドで足りたが他の或農家は一一ポンドも飼料を要してゐる。それが結局は卵一ダース当り費用が二七仙の農家から八八仙の農家まで出している。さて其れでは何故各農家に其れ程大きな差が出たか。以下其の原因についてみていくことにしよう。

1、品種の及ぼす影響

△レグホン種を飼つてゐる農家はプリモス種を飼つてゐる農家の約二倍の羽数を飼育してゐる。一二六〇羽に対して五二六羽の割。
△レグホン種の一羽当り年平均卵生産量は二二二個であるのに比較してプリモス種の其れは二〇〇個である。

△一羽の年平均飼料消費量はレグホン種では九九ポンドであるのに比しプリモス種では一一九ポンド
△一羽当り年総費用の平均がレグホン種で七・二三弗となりプリモス種では七・五六弗となつてゐる
△総収益においてはレグホン種が六・七九弗(一羽当り)、プリモス種で六・一七弗。従つて総収益から総費用を差引いた額、即ち、純収益はレグホン種でマイナス四四仙(一羽当り)であるのに対してプリモス種ではマイナス一・三九弗となる。但し費用の中には労賃として一時間につき一・二〇弗が含まれてゐる事に注意。

△更に産卵量と飼料消費量の差異から次の事がいえる。即ちレグホン種の場合は卵一ダース生産するのに五・四ポンドを、プリモス種では七・一ポンドを要する。これを金額にすると各々一八仙に

第一表

羽数によるグループ	Aグループ				
	200以下	200-599	600-999	1,000-1,999	2,000以上
追加羽数	0	70	279	431	2483
平均飼養羽数	183	394	773	1424	3372
死亡率	16	13	11	11	6
一羽当り投資		\$ 4.11	\$ 4.11	\$ 3.20	\$ 2.54
建物	\$ 3.31	\$ 4.06	\$ 4.11	\$ 3.20	\$ 2.54
器具	.16	.39	1.49	1.04	.69
労働	1.34	1.18			
産卵量	192	230	216	212	227
一羽当り費用と収益					
労働	\$ 1.61	\$ 1.42	\$ 1.79	\$ 1.24	\$.83
建物	.39	.41	.42	.33	.27
器具	.03	.10	.10	.09	.11
使用					
計	\$ 2.03	\$ 1.93	\$ 2.31	\$ 1.66	\$ 1.21
総収益(1羽当り)	5.86	6.70	7.05	6.05	6.54
純収益	-1.73	-	.91	1.23	.27
一ダース当り総費用	.47	.40	.44	.41	.33
一ダース当り総収益	.37	.35	.39	.34	.35
1時間当り労働収益	-	.09	.59	.02	1.59
労働	\$ -20.00	\$ 196.00	\$ 681.00	\$ 26.00	\$ 3723.00

なる。其れで労働費、成鶏減価消却費、其他の費用の総計はレグホン種が卵一ダース生産するのに三九仙、これに比較してプリモス種のそれは四六仙となる。其の結果一時間当り労働収益はレグホンプリモス種各々七〇仙と二〇仙。

2、飼養羽数が収益に及ぼす影響

羽数と収益、費用の関係を調べるために羽数によつて農家を五つのグループに分けてゐる(第一表参照) これによると一般的な傾向として羽数が

多い農家程途中で羽数を増やし、以つて鶏舎や其他の諸設備を有効に使用している。鶏一羽当建物投資額はBグループが高くEグループで最も低い、所が設備投資はDグループが最高でAグループが最低。これを労働量の面からみると、Cグループを例外として羽数が多い農家程所要労働時間数は減少している。Eグループの五分の四の農家は自動飼料供給器を備えており総ての農家（Eグループ）が自動給水器を使用している。一羽当諸費用（建物、設備、労働）はAグループにおいて二・〇三弗で、Eグループでは一・二二弗、Cグループは例外的に高い、というのは労働費が高いからである。

卵一ダース当り総費用はAグループで最も高く、Eグループで最低を示している。労賃を二・二〇弗（一時間当り）とせばAグループでは一羽当り一・七三弗の損失でEグループで二七仙の利潤をあげている。

3、飼料費の影響

卵一ダース当り平均飼料費は一三仙から三四仙までの巾がある。分析の便宜上、最低費用と最高費用の農家各々一〇名づつ選んで、前者をA組として後者をB組として比較してみる（第二表参照）。

この比較によるとA組での一羽当り平均飼料費は一五仙でB組のそれは二六仙。其れを飼料の絶対量でみるとB組では卵一ダース当り六・八ポンド与えているのに比しA組では四・六ポンド与えているに過ぎない、即ち、B組はA組の其れよりも五〇パーセントだけ多く与えているという事になる。又飼料一〇〇ポンド当り価格もA組の其れはB組のそれより安い。その事はA組が地方的に恵まれていたという事もあるのですが、その購入方法がA

第二表

組別	A組（最低費用10名）	B組（最高費用10名）
一ダースり当飼料費	\$ 0.15	\$ 0.26
〃 粒餌	1.8	3.2
〃 粉	2.8	3.6
〃 総飼料量	4.6	6.8
飼養羽数（平均）	651	609
レグホン種の全羽数に占める割合	100	70
近交系雑種の割合	70	20
若雌の割合	95	75
一羽り当産卵量	235	188
一ダース当り費用	\$ 0.34	\$ 0.5
〃 収益	.34	.39
一羽当り利潤	-.06	-2.14

組の方がB組の方より勝つていた、という事もいえるでしょう。尚A組は殆どレグホン種を飼っており、且つ一〇人の中七人までが近交系雑種を飼っている。他方B組では一〇人中七人がレグホン種を採用しその中の二人だけが近交系雑種を飼っているに過ぎない。更にA組ではその飼養羽数の九五・パーセントが若雌で、B組におけるその割合は七五・パーセント。卵生産量ではA組は三三五個（一羽当り）であるのに比してB組のそれは一八八個である。従つて卵一ダース当り費用はB組のA組のそれより高し。

4、市場の影響

例外的に安かつたその年の卵の価格が農家の収益を大きく引下げたという事は既に述べた通りである。それにしてもどこに卵を出しているか、によつて一時間労働力に対する報酬は異なつていて、一般に羽数の多い農家は却売に卵を出して、その平均価格は一ダースにつき三三仙。卵を小売に出している農家は飼育羽数からすると却売に出している農家よりは一般的に少ない、そして小売平均価格は一ダースにつき四二仙。ふ卵業者に卵を出している農家の飼育羽数は前の二組に比してはるかに少ない、その価格は小売値を同じく一ダース当り四二仙。こうして最後に出された一時間当り労働報酬を調べてみると却売に出している農家のそれは三〇仙、小売に出している農家のそれは九九仙、最後の農家（ふ卵業者に卵を出している農家）のそれは八一仙となつてゐる。その事實は市場の如何がいかに利潤に影響しているかがわかる。

四、むすび

以上の事から養鶏業者の利潤は飼養羽数の大小だけに左右されるだけでなく、労働力の利用方法、品種、飼料の使用法、市場等にも大きく影響されるということを強調したい。（抄訳 山里 将晃）

